

(1)はじめに

1)邪馬台国時代背景

1. 集落形成 日本は弥生時代に属し、その直前に大陸より流入してきた稲作文化と鉄や青銅などの青銅器が普及して耕地が一挙に開墾された時代である。農地開発により生産量が増えてくると家族単位の労働で追いつかなくなり、共同作業により集落が形成されていった。
邪馬台国の人家は約7万戸で人工にすると56万人程度と言う大規模な国であったようです。
2. 神獸鏡 卑弥呼が魏帝から貰い受けた鏡は一般的には「三角縁神獸鏡」と思われてきたが、最近の見解では「平縁画紋帯神獸鏡」ではないかと言われている。これ等の鏡は生活用の実用的なものではなく、宗教的な祭祀道具であったと推定されている。同じく銅矛、銅鐸なども宗教儀式用と推定される。

3. 青銅器・鉄器

弥生文化の大きな特徴は鉄器や青銅器の普及である。日本ではこの二つの文化が全く同一時期に流入されたと言う特異性から、青銅器は祭祀用、鉄器は農具と武器にと特化されたと言う特徴がある。
弥生後期に突然、銅鐸が出土しなくなり何か政変があったと考えられる。

2)邪馬台国論争継続中

両者の主張 邪馬台国論争は既に江戸時代から始まって、明治時代に到り、近代的な学問として再出発したが北部九州説と畿内説と言う二大潮流が生まれ終わりのなき論争へと進展している。

畿内論者は「纏向遺跡の出現は三世紀初頭であり、ヤマト朝廷誕生を意味する前方後円墳の出現は三世紀のことであり邪馬台国時代と纏向はピッタリ重なる」と言い、北部九州論者は「纏向の出現は三世紀後半以降で北部九州の邪馬台国が東に移って纏向は生まれた」と反論する。

邪馬台国連合の所在地については畿内倭説と九州説が対立して決着を見ていない。倭人伝の記事のままでは、邪馬台国は大和でもなく、九州でもなく、遙かに遠く太平洋のど真中の海中になってしまう。そこで色々な解釈で両者の論争が始まった。3世紀の編者は多分、帯方郡の使者の報告をもとに記載した為に魏志倭人伝に記載された当時の各国までの距離と方角の情報が辻褄が合わない。5世紀頃には畿内勢力がほぼ日本全土を統一していたので随書でも「倭国は耶麻堆に都す。乃ち魏志の所謂邪馬台なる者なり」

- ・日本書紀の編者は卑弥呼を神功皇后に見立てて為に神功皇后の 生存年代を百年以上も遡って卑弥呼の時代に合わせている。更に邪馬台国は畿内大和との固定観念が見られる。
- ・畿内説: 松下見林、新井白石、
- ・九州説: 本居宣長、近藤芳樹、

3)魏志倭人伝の問題点

倭人伝 晋の陳寿(233～297)筆録 正式には「三国志・魏書・東夷伝」のこと。倭人伝によると帯方郡の使者は朝鮮半島の西岸を下り、釜山に近い狗邪韓国、対馬、壱岐を経て、末盧国から伊都国を通り、奴国に到着する。

問題点 朝鮮半島の帯方郡から邪馬台国に至る行程に問題が有る。
「倭人は帯方郡の東南海上の中にある」と始まる。北部九州から邪馬台国までの旅程には「狗邪韓国から海を渡り、千余里で対馬、更に対馬海峡を南に千余里渡って壱岐に至る。更に海を渡って千余里、末盧国に到り、九州島に上陸して、ここから東南に陸行5百里で伊都国、東南百里で奴国、更に東二百里で不彌国に到着する」とある。この先に問題の一節が北部九州から邪馬台国までの旅程、には「南、投馬国に至る水行二十日(中略)、南、邪馬台国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月」とある。このまま読むと邪馬台国は福岡市から南に二十日行き、投馬国に至り、更に水行十日陸行一月で九州の遙か南の太平洋の海中。

4)伝統的大和説の原点

1. 日本書紀 神功皇后時代に「魏志倭人伝」の邪馬台国を引用しているので邪馬台国はヤマトと解釈か？
「隋書」倭国伝も倭国の都がヤマトにあると記録。
2. 北畠親房 南北朝時代の北畠親房は邪馬台国とヤマトを同一視している。

3. 随書 「倭国は邪摩堆に都す。即ち魏志の所謂邪馬台なる者なり。」とヤマト国は
 7世紀 大和朝廷のある奈良と見なしている。
 隋書・東夷伝 選者は顔師古、孔穎達、許敬宗ら。
 6～7世紀 隋書は隋王朝38年間の正史である。
 本紀5巻、列伝50巻、五代史志30巻の全85巻
 志81巻の東夷伝「倭国伝」に日本からもたらされた有名な国書がある。
 「日出處天子致書日没處天子無恙云云(日出ずる処の天子、日没する
 処の天子に致す。恙なきや云々)」
 隋の煬帝が聖徳太子の手によるこの一文を詠んで烈火の如く怒ったと言う。
 また、邪馬台国の場所について魏書の邪馬台国の場所が大和朝廷と同じ
 と記載している
 「その国境は東西五月行、南北三月行にして、各々海に至る。その地勢は
 東高くして西下り、耶磨堆に都す。即ち魏志の所謂、邪馬台なる者なり」
 随書・東夷伝の百濟の条;
 百濟には「新羅人、高句麗人、倭人をまじえ、中国人もいる」
 ・港湾を持つ大都市には昔から他国からの移住者もいたようである。
- その他 直木孝次郎
 7世紀の推古天皇や齊明天皇と言った女帝もモデルにして創作された偶像
 が神功皇后であると提唱。

(2)邪馬台国論争

1)畿内大和説

- 奈良で纏向遺跡が発見されてから俄然畿内説が元気になってきた。なぜなら
 纏向遺跡の出現は三世紀初頭であり、ヤマト朝廷誕生を意味する前方後円墳
 の出現も三世紀の事であるから邪馬台国の時代と纏向とが重なるから。
1. 松下見林 松下見林「異称日本伝」
 書紀の編者が卑弥呼を神功皇后と見なしていた。更に邪馬台国は畿内大和
 との固定観念が見られる。
- 偽僭説(ギゼン) 本当のヤマトは畿内に有ったのに嘘をついた北部九州の卑弥呼が倭王と認め
 られてしまったのではと新井と本居は言う。
2. 新井白石 新井白石「1657～1725」
 ・倭人伝地理の記載を吟味始める。白石は末蘆が肥前松浦、伊都が筑前の
 怡土郡、奴国が博多辺りと指摘。更に不弥が宇佐とし、投馬国は備後の鞆津
 は畿内大和とした。投馬国以降で南を東と読み替えている。
3. 本居宣長 本居宣長
 ・魏書記載方角を魏書通りに解釈し邪馬台国は九州南方面と結論に達しな
 がら邪馬台国は大和で卑弥呼は神功皇后の名前を騙ったものと見なした。
 ・魏書のヤマトは九州南と見極めながら卑弥呼は倭王を語る九州の女酋長
 で倭王は大和にあると結論した。
4. 那珂通世 明治時代の日本東洋史学の創始者である那珂通世は上古年代考(M11、
 1878)と日本上古年代考(M21、1888)で卑弥呼と神宮皇后の同一視は
 誤りと指摘し近代史学で初めて邪馬台国を論じた。
5. 内藤湖南 1910 内藤湖南は「卑弥呼考」を著し、倭人伝に7万余戸とある大国は辺陲の筑紫
 ではなく大和が穏当であると主張。
 中国の古書は方角を東と南、西と北を誤る事は珍しくないので投馬国を北
 九州の南でなく東に解釈を主張、また卑弥呼は垂仁の皇女ヤマトヒメと低減。
6. 三宅米吉 同調者として三宅米吉がいて彼は当時の中国では倭国が会稽・東冶の東
 にあると思われ、また風俗も中国南部と似ているとの事から倭国は南北に
 長いと想定されていたのではないかと主張。更にこの先入観を一步進め
 たのは和歌森太郎である。
7. 山田孝雄 内藤湖南は東遷コースを瀬戸内海と考えたが、山田孝雄、笠井新也、末松
 笠井新也 保和氏の3人は出雲経由の日本海コースでは無かったかと提唱。
 末松保和 更に富岡謙蔵は卑弥呼に贈与された100枚の中国鏡について鏡を出す
 墳墓が畿内で、古墳からという事で畿内説を補強した。
- 卑弥呼は誰 更に、卑弥呼のモデルについても神功皇后説が言われていたが、湖南
 はヤマトヒメ説を避けて「タトヒメ」を、笠井は崇神の叔母であるヤマトヒ
 モトヒメを当て、その墓についても箸墓説を提唱した。

8. 富岡謙蔵 弥生時代の北部九州で出土する鏡が後漢鏡かそれ以前のもので畿内は魏・呉・蜀の三国時代以降で占められていることから、弥生時代から古墳時代にかけて北部九州が衰弱して畿内が興隆した証と捉えて古墳が畿内中心に造られていた事からも卑弥呼の邪馬台国は畿内と推測。

2)九州説

九州説では邪馬台国は北九州南部の筑後山門郡あたりではとされている。九州説の場合でも遅くとも5世紀初めには国土は統一される。

1. 近藤芳樹 近藤芳樹(1801～1880)
周防の学者で、宣長の考えを更に進めて卑弥呼は九州の女酋長で、邪馬台は肥後菊池郡の山門(ヤマト)とした九州説を唱えた最初の人。
でありながら「卑弥呼はヤマトの号を盗み、住所を邪馬台と名付け自ら倭王と名乗り漢に通へり」と書紀の記事と調和させている。
2. 那珂通世 那珂通世(1851～1908)
「上代年代考」(1878)、「上世年紀考」(1897)を著し、日本書紀の年代は推古9年(601年)から讖緯説に基づき1260年遡り神武即位をBC660年としたことを明らかにした。また応神天皇は4世紀後半の天皇として神功皇后は卑弥呼より約100年後の人であると推測した。つまり神功皇后と卑弥呼は別人と。
菅政友は1890年に「倭国考」を著して西暦2.3世紀に中国人が倭と言ったのは筑後9国の事であると唱えた。同年星野恒は卑弥呼を「西陲の一女酋」とし、筑後山門郡にいた土蜘蛛の田油津姫の先代であると結論した。
3. 菅政友 星野恒 筑後国山門郡に邪馬台国があったと主張
4. 白鳥庫吉 M43、1910 白鳥は魏志の旅程について帯方郡から邪馬台まで「一万二千余里」と記載があり、帯方郡から不弥国までの旅程が「一万七百里」デアルことから不弥～邪馬台国まで一千三百里となるので不弥～邪馬台国の記載距離が誇張された数値であると提唱。また「陸行一月」は「陸行一日」が正しいと主張。水行三十日は長すぎるが有明海を大きく迂回すると解釈。
5. 喜田貞吉 大正 筑後国山門郡に邪馬台国があったと言う星野恒説を支持し、更に邪馬台国とヤマト朝廷は別物と推理。
6. 橋本増吉

橋本氏は一萬二千余里と水行・陸行の日程記事は別の出典によると考え里数記事は帯方郡の役人の報告によるもので日程記事は倭人等からの聞き取りによるもので誤りが生じたのではないかと提唱。

橋本は更に古墳埋葬の魏・晋鏡について鏡等は古墳のできた時代よりも人から人への伝達等でそれ以前のものであり、何年前のものかは不明なので年代は特定に利用は不適であると大和説に反論。

7. 榎一雄 戦後 放射説 戦後、邪馬台国論争に新たな論争を投じたのは榎一雄の「放射説」である。「魏志・倭人伝」では伊都国の前と後で記述方法が変更になっている。つまり「方向・距離・国」記載から「方向・国名・時間」に変わっている
榎一雄は旅程記事の記載方法が末盧国までと伊都国以下では異なっている事に着目して、伊都国以降の旅程は伊都国から個々に放射状に記されているとしたことで日程記事でも九州説は成立するとした。

8. 関悠二(九州説)

- イ。高良山 久留米市御井町にある標高312mの山で高良大社(高良玉垂命)が鎮座する。参道を少し登ると両側に馬蹄石が出現する。(70*80)cmくらいの大きさの巨岩で山の周囲を囲んでいる神籠石である。白村江の戦い(663年)後に軍事目的で築造されたのではないかと説もある。
高良山は耳納山系の西はずれにあり、籠城しても兵糧が確保できる。山上からは筑後川・筑後平野が一望に望めると言う好立地にある。「肥前国風土記」によれば景行天皇の九州遠征時に高良に行宮をおき国見をしたと言われる。神宮皇后も北部九州遠征時に高良山麓の旗崎に滞在したと言われ、磐井の乱でもここが最後の戦場となっている。筑後国府も高良山麓に造られた。「魏志倭人伝」によれば邪馬台国は奴国や伊都国よりも奥まった所にあったと記載されている。海に近い博多周辺は一端戦乱が起きると奇襲に逢う可能性が高く防衛上奥まった所が有利であるとも考えられる。実際白村江で敗れた後、中大兄皇子は大宰府付近に水城と大野城を築いているが、更に熊本に鞠智城(クチ)を築いている。この大宰府自体も遠賀川から直方平野を攻められると危険にさらされるため筑後まで引いて高良山あたりが最適な地となる。邪馬台国九州説で有力視されている山門は高良山と女山

に囲まれた場所に位置する。

大宰府や博多の地が長く北九州の中心であったのは対韓・対支上であり軍事上で言えば筑後が最適なのかも知れない。

ロ。高良大社 豊比咩命

高良大社には高良玉垂命だけでなく豊比咩命も祀られている。

豊比咩命(トビミミコト)女神は筑後川周辺のアチコチで祭られている。

福岡県宗像市の宗像大社の「宗像大菩薩縁起」によると「神宮皇后三韓征伐の折、船上で皇后が天神地祇、海神、水神を祀ると竜宮城から妹の豊姫が現れた」ので竜宮城の海神に使いさせて「「竜宮城の竜神と私は親子の契りで結ばれていた誼で乾珠・満珠(シオヒ、シオミチ)をお貸し下さい」と海神の加勢を得て新羅を撃つことが出来たと言う伝承があり、神功皇后の三韓征伐後、豊姫は乾珠と満珠を筑後川流域の肥前河上宮に祀ったと言う。

高良大社では武内宿祢・真根子が祀られており、高良玉垂命は武内宿祢ではないかの伝承もある。と言うのは葛城襲津彦の末裔とされる臣が、筑後川上流の浮羽郡に勢力を張っていたこと、同じく「紀(丹波)氏」が高良大社の座主を務めていたことから。神功皇后とトヨの関係は他にも三韓征伐の時、穴門に建てた「豊浦宮」があり、「海幸・山幸神話」の豊玉姫も同じくトヨである。

ハ。神功皇后西走

三韓征伐 熊襲征伐

三韓征伐のため若狭の角鹿(敦賀)を出発した神功皇后は豊浦津で如意珠を得て、穴門に豊浦宮(山口県下関市)を建て、翌年春に筑紫の岡県主(福岡県遠賀郡芦屋町)が周防まで神宝を捧げて出迎えて九州へ、次に伊都県主(福岡県糸島郡)の出迎えて隼県(福岡市)の檀日宮(カシバミヤ)へ入場し、荷持田村(トリタノレ(朝倉市))を討って松峽宮(マツオミヤ)へ移りここから山門県(山門郡山川町)の土蜘蛛の女酋長田浦津媛(タブラツヒメ)を打ち取ると海を越えて新羅征伐後、檀日宮へ凱旋した。

ニ。吉野ヶ里遺跡

1980年代に大規模工業団地の建設が立案され事前調査が始まったがとてつもない遺跡である事が判明して平成元年(1989)には国営歴史公園として動き出した。この立地は筑後川両岸に佐賀平野が広がり東西を流れる2本の川を下れば筑後川に出て有明海に直通している。弥生時代初頭に遺跡南部には南北250mの楕円型環濠集落が萌芽として認められている。更に弥生時代前期前半には北側に2.5ヘクタールの環濠集落が出現しており、竪穴住居や甕棺墓・土墳墓・木棺墓跡が残り、青銅器の鑄造跡も見られてかなり早く青銅器の生産が始まっていたようである。中期に入ると推定20ヘクタールと相当大規模になってくる。後期の吉野ヶ里は更に発展して40ヘクタールを超す大集落に発展している。吉野ヶ里集落の特徴として、農耕の痕跡が見られず、絹製品が多く発掘されたり、青銅器の生産が行われていたようである。水運の地の利が良い所から「交易国家」で50棟もの倉庫群の跡も穀物倉ではなく、手工業と交易品の貯蔵庫ではないかとの説もある。

6) 邪馬台国東遷論

1. 安本美典

天照大神と卑弥呼が重なるのではと提唱。天照も卑弥呼も共に女性のシャーマンで、宗教的権威を持ち弟がいる。三種の神器は北部九州では副葬品であり、弥生時代に畿内には副葬は見られない等から邪馬台国は福岡県甘木市と比定。また甘木周辺には奈良盆地とそっくりの地名が残されている。安本美典は十世紀後半の「延喜式神名帳」に出てくる高良山周辺の「高良玉垂神社、豊比咩命神社、伊勢天照御親神社」の3つの神社の存在から筑後川周辺に邪馬台国があったのではと推測している。

2. 和辻哲郎

和辻哲郎は九州筑紫の邪馬台国が東に移ってヤマトを建国したと言う邪馬台国東遷論を提唱。ヤマト建国後畿内の銅鐸文化圏が消滅したのは九州の銅剣・銅矛文化が東に移ってヤマトが完成したと考えた。

(4) 邪馬台国の生活と文化

魏志倭人伝による生活スタイルを以下に記載。

1. 気 候

魏志倭人伝の記事

「倭の地は温暖、冬夏生菜を食し、皆徒跣す」

・倭国は温暖で、冬でも夏でも野菜を食べており、誰もが裸足であった。

BC1～AD7の古代は異常気象で小氷河期に属していたようである。

この時代、中国南部の朝貢までが氷結して穀物が獲れず、倭では洪水で耕地が水没したと言う推測もあり、気候変動で世相が乱れた。

卑弥呼の時代、中国ではAD220年に後漢が滅び、朝鮮半島では朝鮮族が蜂起して中国の出先機関を襲撃している。

2. 言語

倭国に入った魏志は人名、地名、国名の音の響きを漢字に写して表記。

倭人伝に書かれる固有名詞は6～7世紀の日本語に近いと思われる。

(卑狗＝彦、卑弥呼＝姫御子、はい＝おう噫・・・)

倭人の言葉を復元すると現在の沖縄の言葉に近いと言う分析があるが日本語は南方系の言語に北方系の言語が重なって成立と言う説もある。弥生時代

3. 衣服と髪型

倭人の服装は男女とも貫頭衣を着ており、男性は下にズボン女性は下に巻きスカートを身に着けていた。(埴輪等から推定)縄文時代は網布であったが弥生時代には織布に変化した。弥生人は機織りで縫った麻布の衣服を着た最初の日本人であった。更に弥生時代には染色技術も発達して白色のみならず、赤や紫に染めた布も使われた。装飾品は呪術的な意味と権威づけで髪飾り、首飾り、指輪などが使われた。刺青の風習があった。

4. 化粧

「男子は大小となく、皆鯨面分身す」とあり続いて「倭の水人、好んで沈没して魚鮑を捕え、分身した大魚・水禽を厭う。後やや以って飾りとなす」とあり海に潜って魚介類を獲る場合に大きな魚から身を守る為に水中での身の危険から身を守るために刺青をしていたようだ。女性については不明。

5. 食生活

魏志倭人伝記載と食材の遺物から穀類・魚介類・野菜・肉・飲酒などバラエティに富んでいたようである。とは言いながら人骨からは栄養失調の傾向がある。

6. 器の変遷

縄文時代は煮炊き用の土鍋が多かったが、弥生時代に入ると煮炊き以外に食器用土器、浅い鉢、装飾用なども見られるようになる。BC5世紀ころ、大型の甕や高坏が大陸から登場して浅鉢が消えた。BC3世紀頃の弥生前期には煮炊き用の甕に土製の蓋を被せるようになった。弥生時代中期から近畿地方

7. 集落と住居

邪馬台国

邪馬台国時代は弥生期に属し、稲作文化と青銅器・鉄文化が大陸から流入しそれまでの家族単位の生活から共同生活が始まり、集落が形成されるようになった。弥生時代の集落は前期から中期にかけて濠が巡らされた環濠集落となり、丘の上に6～10戸前後を単位として形成されていった。当時の代表的な竪穴式住居は地表を50cm程掘り下げ、太い柱を四隅に建て、上に梁を渡し、さすを交差させて棟木を乗せ、周囲から垂木を寄せかけて屋根をかやや葺で葺いていた。住居はおおむね円形で長方形、楕円形も見られる。一戸の建物内には父母と3～4人の子供と祖父母で5～8人が住んでいたと思われる。

「父母兄弟、臥息する処を異にす」(魏志倭人伝)

弥生時代の住居は十畳程度の住まいの中に一家が住んでいたことになる環濠集落の中には排水路と導水路の跡が見つかり、上下水道的な施設の存在も示唆されている。

8. 制度と集落

魏志倭人伝では

「会同、座起には、父子・男女別なし・・・大人を見るに、敬する所は但手を搏ち、以って跪排に当つ」とあり、邪馬台国時代は年齢差とか男女差が無かったようである。一方で大人とか下戸と呼ばれる身分制度が見られる。

9. 大陸交易

邪馬台国時代(弥生時代後期)に大陸との朝貢・交易が盛んであったようであるが何が取引されていたのか。

魏志倭人伝には

「倭王、……。生口、倭錦、絳青縑(こうせいけん)、綿衣帛布、丹、木附短弓矢を献上す」とあり、倭国は製糸・紡織技術に特化したシルクの国であった。